

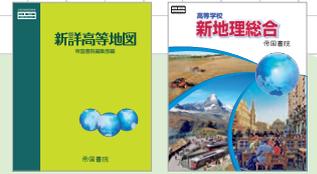


中高接続の視点を生かした「地理総合」の実践 —アフリカを例に—

長野市立裾花中学校（元長野県長野南高等学校） 篠原 敏紀（しのはら・としのり）

—使用教材—

『新詳高等地図』
『高等学校 新地理総合』



1 はじめに

筆者は、長野県の人事交流制度などにより、中学で10年、高校で4年勤務してきた。本稿では中学・高校の両方で勤務してきた経験を生かし、中学での学びを踏まえた高校「地理総合」の授業実践を紹介したい。

2 中高の接続と授業のねらい

中学では、アフリカ州の単元で貧困や国際協力を主題に設定して学習することが多い。以下は筆者の中学での実践における単元展開と中学生が書いた単元のまとめである（表1）。

表1 中学における地理的分野「アフリカ州」の単元展開とまとめ

単元を貫く問い 「資源が豊富なのに、なぜアフリカでは貧困から抜け出すことが困難なの？」		
時数	探究内容	中心発問・本時の問い
1	アフリカ州をながめて	「アフリカ州はどんな場所だろう？」 ・自然環境・地形・歴史・文化・宗教
2	アフリカ州の産業	「なぜ特定の輸出品に頼るの？」 ・モノカルチャー経済・フェアトレード ・カカオとチョコレート・レアメタル
2	アフリカ州の取り組み	「アフリカ州にはどんな支援が必要？」 ・AU・NGO・ICT教育・ネリカ米
1	まとめ	「単元を貫く問いへの答えを考えよう」
	生徒A：貧困の理由は、植民地時代にヨーロッパの支配によって国境線が引かれ、紛争が今でも起こっているから。また、資源は多いけれど、モノカルチャー経済で安定した経済にならず、教育も行き届いていないので、食料・医療などが十分ではない。いろいろな理由があって貧困から抜けられない。そのため、フェアトレードで収入をしっかりとったり、ネリカ米を育てたりNGOが病院を設立したりして支援を進めている。	

高校「地理総合」では、同じような内容をただ繰り返すのではなく、中学での学びを生かして学習をすることで、より地理的な見方・考え方を働かせて現代的な諸課題に向き合わせ、その課題解決に向けて考える公民的資質・能力の育成につなげていく必要があると考える。実際、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』の第2章第1節「地理総合」には以下のようにある。

「指導計画の作成と指導上の配慮事項」

(1) 「地理総合」は、中学校社会科地理的分野との関係が深く、また社会的事象を学習の対象とする歴史的分野及び公民的分野の学習を前提として構成されているため、必要に応じて中学校社会科の学習を振り返り、関連を図りながら指導する。（下線は筆者、一部抜粋・加筆）

「目標」

(2) 地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して（中略）概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。（下線は筆者）

今回の高校「地理総合」での実践では、こうした中学での知識や学びを土台にしつつ、地理的な見方・考え方を働かせる探究的な活動を通して、高校での学びにつなげ、その解像度が上がるようにしたいと考えた。その上で、現代的な諸課題の深層部にある、より複雑な背景への考察や、課題解決に向けた未来への構想・議論を行う場を設け、思考力・判断力を育成したいと考えた。

3 単元設定の理由と単元展開

15世紀以降、帝国主義の下で植民地支配が進められたアフリカでは、奴隷貿易やプランテーションなどさまざまな犠牲を強いられてきた。民族が引き裂かれ、人種差別や強制（低賃金）労働、紛争などの要因でモノカルチャー経済から抜け出せず、貧困がまん延していった。

しかし一方で、近年、急速な経済成長を遂げるアフリカは「地球最後のフロンティア」とも呼ばれている。この単元では、あえて筆者が中学で用いた単元を貫く問い「資源が豊富なにもかかわらず、アフリカではなぜ貧困から脱することが困難なのか」を高校「地理総合」でも設定し、「資源と貧困との関係」に焦点化した問いから探究をスタートした。探究の終末には、今後のアフリカの

【中学での知識や学び】・・・テキストマイニングや生徒への発問で多く挙げた用語や概念的知識

○「貧困」 ○「植民地支配」 ○「紛争」 ○「モノカルチャー経済」 ○「進まない自国産業の育成」 ○「発展途上国が多い」 など

【単元を貫く問いの設定】「資源が豊富なのに、なぜアフリカでは貧困から抜け出すことが困難なの？」

【中学での知識や学びの深層部へ導き、地理的な見方・考え方を働かせながら単元の問いにせまる探究学習】(自由進度学習)

★「アフリカに豊富にある資源は、アフリカの貧困を救えないの？」	★「植民地から独立したのに、アフリカの紛争はなぜなくなるしないの？」	★「外国企業の進出を、アフリカの人々はどう見ているのだろうか？」
エキスパート資料群① テーマ「資源の呪い」 ・シエラレオネ内戦 ・血塗られたダイヤモンド ・ボツワナの政策 ・コンゴの児童労働	エキスパート資料群② テーマ「歴史と紛争」 ・分断の歴史とルワンダ内戦 ・子ども兵と武器ビジネス	エキスパート資料群③ テーマ「外国企業の進出」 ・開発の必要性と危険性 ・中国企業のアフリカ進出

【エキスパート活動後の生徒の答え】

○ダイヤモンドは、内戦が起きると武器を手に入れるためのものとなり、紛争を長引かせ、貧困状態にさせる道具になってしまった。また、資源に頼る経済は輸出先の海外の色をうかがう政治を生み、民主的な意識が生まれにくくなってしまふ。さらに、法外な利益になるダイヤは非合法流出や密輸がされている。	○植民地支配を受け、「自分はツチ」「あの人はフツ」というような意識が植え付けられて民族対立が生まれた。一部の民族を優遇して他方の民族を支配するヨーロッパの分断統治によって、独立後も虐殺が起きてしまった。紛争によって、難民や、子どもの誘拐や犠牲といった課題は、今も引き起こされている。	○先進国の技術やインフラ整備など恩恵を受けることが多く、感謝するアフリカ人もいる。しかし、外国に頼った経済や、資源や原料が搾り取られていることを考えると良いことばかりでもない。中国の雇用創出先となってしまっている面もある。でも、外国の技術で救われる命もあり、どちらとも言えない。
---	---	---

【ジグソー活動後の単元を貫く問いへの生徒の答え】

○豊富な資源が周りの国や民族の紛争の拡大につながってしまう材料となってしまっている面もある。資源があるということだけでは皆が幸せになることには結び付かない。その資源に依存し戦争や紛争にベクトルを向けてしまうことで、国の教育に力が入らない。豊富な資源やアフリカに技術がないことをいいことに先進国が利益をかっさらっているのではないか。	○資源は奪い合いを生み、外国が介入して長引いてしまう。小さい子どもたちもその紛争に巻き込まれていて、学習する場が設けられていないため、識字率も低いままになってしまう。人材が育たず医療が不十分だったり、資源を公正な価格で取引する交渉もうまくいかないから悪循環。資源や外国企業や民族間対立を乗り越えて、ボツワナのように、資源を教育や技術と交換していき、人材を育てていかないと貧困からは脱せないと感じた。
---	---

<p>【課題解決に向けての構想・議論 ①】★「なぜアフリカで LEAPFROG が起きているのか？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生産年齢人口比の推移予想 ・アフリカの経済成長率 ・M-KOPA と M-PESA ・復興したルワンダ ・アフリカでの主要国の進出状況 ・命を救うドローン (動画) ・アフリカでイノベーションが起こった理由 (動画) <p>○「銀行口座がなくても出稼ぎの給料の一部を送金できたり、携帯にチャージした通話料が通貨のようにやり取りできたりする。アフリカの人々の暮らしにあった電子マネーシステムが取り入れられているから。」</p> <p>○「これからの時代、アフリカは人口ボーナスが大きいし、既得権益がなく、規制も少ないアフリカは、新興国が最新のテクノロジーや ICT を試したり一気に広めたりするのに抜群の地域だったから。トヨタグループも輸血用ドローンなどの医療支援に出資していて驚いた。」</p> <p>○「昔の植民地支配の影響で英語が公用語だったから。しかもインフラなどが整備されてない分、まささだから最新技術をそこに取り入れやすい。」</p>
<p>【課題解決に向けての構想・議論 ②】★「アフリカに進出した日本企業は、アフリカでどんな活動をしているの？なぜアフリカなの？」</p> <p>○味の素を調べた生徒：「西アフリカのスープ文化を生かして進出している。単価を下げて小分けにして1パック単位でキオスクで販売している。乳児死亡率が高い貧困地域の赤ちゃん用に、離乳後の栄養補給の目的でも販売していることがわかった。」</p> <p>○ヤマハ発動機を調べた生徒：「水の浄化や農業技術、漁業関連の販売と教育による支援活動をしていて、現地の下痢や発熱症状の割合も減っていた。」</p> <p>○カネカを調べた生徒：「アフリカにはエクステやウィッグを使っておしゃれを楽しむヘアスタイル文化があり、女性用のウィッグ素材を提供している。」</p> <p>○BE FORWARD を調べた生徒：「新車を購入する余裕のない人向けに中古車のネット(英語のサイト)販売をしている。前払い一括支払いによる高い回収率で成功した。しかも、旧イギリスの植民地だった国は右ハンドルなので日本の中古車がそのまま売れるらしい。」</p>
<p>【課題解決に向けての構想・議論 ③】★「日本企業は積極的にアフリカに進出すべきか？進出する際、どんなことが大切か？」</p> <p>○「アフリカの歴史や環境や文化などに配慮しながら、社会貢献をしつつ、お互いの利益を求めていなら進出すべきだと思う。」</p> <p>○「進出すべきだ。自分たちの利益だけを見ず、現地の人々と向き合いながら教育や人材育成と一緒にしていくことも忘れてはダメだと思った。」</p>

<p>【振り返り】 「単元の初めの頃の自分の予想と、今の自分のまとめを比較して気付いた変化は？また、変化した理由は？」</p> <p>○「初めはモノカルチャー経済が原因だと思ったけど、資源があるとデメリットもあると気付けたし、モノカルチャー経済から抜け出す難しさも知れた。あとは、〇〇さんの発表で中国の開発の良い面・悪い面の両面を聞いて、日本企業はこれからアフリカとどう向き合っていくべきか考えを深められた。日本企業がこんなにすごいと思わなかったし、アフリカの価値がこんなに上がっているとは思わなかった。」</p>

図1 単元展開と生徒の学び(5時間分)

展望や、2025年のTICAD(アフリカ開発会議)でも議論されたアフリカへの開発や投資、日本企業との関わりについて、社会参画の視点を踏まえた生徒の考えを引き出せるよう、ジグソー法を用いた授業を構想した(図1)。

4 授業展開

(1) 中学地理的分野との接続を意識した導入

まず、生徒に既習内容を想起させつつ、アフリカのイメージをスプレッドシートに入力してもらい、テキスト

マイニングにかけた(次頁、図2)。するとやはり「貧困」「発展途上国」「植民地」「紛争」といった言葉が多かった。

そこで、「アフリカの植民地」「モノカルチャー経済」「アフリカの貧困率」(次頁、図3)「アフリカの鉱産資源」(次頁、図4)を示しながら、貧困率が高い一方で資源は豊富にある現状を確認し、単元を貫く問いを設定した。

その過程で改めて、「なぜモノカルチャー経済なの?」「なぜ植民地の影響が今もあるの?」「なぜ紛争はやまないので?」などと、生徒たちの持つ、貧困に結び付く素朴



写真 ジグソー活動で自らの考えを伝え合う生徒（筆者撮影）

生徒の回答（図1）にあるように、中学の学びから発展し、多面的・多角的に貧困という課題を捉え直していく生徒の姿が見られた。また、貧困が容易に改善されない複雑さに気づき、さらに新たな問いを持つ生徒や、その解決に向けての教育や技術支援をはじめとするさまざまな政策や人々の努力に課題解決の糸口を探る生徒の姿もあった。

（4）アフリカの課題解決に向けた未来への構想・議論 ～日本企業の進出を例に～

アフリカの課題を見つめてきた生徒に対し、今度はGDPの変化や携帯電話の普及（図5）などの資料を提示し、アフリカには近年目覚ましい経済発展を遂げている国もあることに気付かせた。そこで「なぜアフリカでLEAPFROG（先進国がたどってきた段階を一気に飛び越えた発展）が起こっているのか？」という問いを導き、LEAPFROGの実態や要因を資料（QRコード）から探究した。生徒は、人口ボーナスのピークを迎えようとするアフリカや、負の歴史（植民地支配など）を逆にエネルギーに変えて発展するアフリカの姿、さらにICTやインフラ整備におけるアフリカの利点などに気付いていった。

また、日本企業もアフリカに多く進出していることに気付いた生徒がいたことから、その日本企業について調べ、進出目的や企業の工夫・販路などを調べる時間を追加で確保した。異なる企業を調べた生徒同士で対話活動を設定していくと、現地の人々の歴史・習慣・文化・ニーズに寄り添った支援をしながら進出していることに気付いていく生徒の姿があった。

終末には、「日本企業は積極的にアフリカに進出すべきか？進出する際、どのようなことが大切か？」という、将来にベクトルを向けた課題を投げかけた。これまでの単元を貫く問いに関わる学習のまとめでもあり、価値判断を問うような課題に個人で向き合ってもらった。

自分の考えを整理した後、班で議論を深めた。議論を通して生徒たちは、外国企業が利益を求める一方で、アフリカの抱える複雑な背景を理解しようと努め、現地の

人々を尊重し、苦しみや喜びに寄り添う相互理解の上に信頼を得ながら進出し、伴走しながら共に経済発展を目指している姿があることを学んでいったのであった。

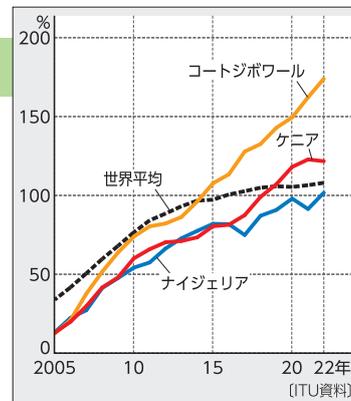


図5 アフリカの主要国の携帯電話契約率の推移『高等学校 新地理総合』p.105

5 おわりに

本実践では、中学でアフリカの「輪郭」を描いた生徒たちが、高校の地理総合というレンズを通すことで、それを「問い直す対象」として探究していった。その際、中学の地理だけでなく歴史や公民の学びを想起し、見方・考え方を働かせるような問いを介在しながら諸課題の本質（深層部）へ探究を深めていくよう工夫した。

また、今回は日本企業との関わりに着目したが、生徒たちが身近なものに結び付けつつ自分事としながら探究していく中で、現代の諸課題への解決に向けて未来を構想・議論する段階にもチャレンジし、社会参画の視点からも、さらなる公民的資質・能力の育成を目指したい。

そのためにも筆者はまず、現代の諸課題を見つめることからスタートし、他方で中学までの生徒の理解や学びを把握した上で、さらに深める問いをいかに立てるべきかを考えた。そして、問いに対してさまざまな角度から論理的に説明できるような生徒を目指し、対話・発問しながら、生徒と一緒に考えていけるような授業を目指した。

また、単元の最後には、最初の自分の予想と比較し、どれだけ学びが深まったかを振り返ってもらった。すると、学びが深まった要因として対話の意義を認知できた生徒もいた。中学での学びをさらに深められた自分やその方法に気づき、非認知能力を高めることも、学びを主体的に進める原動力になることを期待したい。

〈参考文献〉

- ・佐藤廉也（2023）『大学の先生と学ぶ はじめての地理総合』KADOKAWA
- ・吉田敦（2020）『アフリカ経済の真実－資源開発と紛争の論理』筑摩書房
- ・「NHKスペシャル」取材班（2011）『アフリカ 資本主義最後のフロンティア』新潮社
- ・椿進（2021）『超加速経済アフリカ LEAPFROGで変わる未来のビジネス地図』東洋経済新報社

「エキスパート資料」、[LEAPFROG]に関する資料はQRコード(帝國書院 Webサイト)よりご覧いただけます。

